

Twycross RG, Lack SA 著

武田文和（埼玉県立がんセンター副病院長）訳

末期癌患者の診療マニュアル

—— 痛みの対策と症状のコントロール ——

芳賀敏彦（国立療養所東京病院病院長）

日本においても末期癌患者の診療に対する研究は進められており、また社会的関心も^{クマ}充ち多くの図書や他のマスメディアでも取り扱われている。然し一方医療の現場に目を向けると、これ等の患者の診療に一定の病床を持って計画的に行っている所は我が国ではまだ数ヶ所しかない。このような現状からみると多くの末期癌患者のケアはむしろそのような専門施設以外の一般医療機関が少数であるが在宅で行われている。

問題はそのような所でどのように行われているかではこれは今の所それぞれの所でその考え方と知識と手技を模索しながら努力を重ねて行っている現状である。

このような状況下においては何か手にとるような指導書が無いかと誰しも思うに違いない。

この願いにまさにぴったり合ったのが本書である。この方面に古くから深い造詣と実績を持つ英国と理にかなった事は積極的に取り入れ発展させる米国の著者がそれぞれの立場を総合しながら協同で書き上げているのが本書の特徴を造っている。

その内容は全体を通してまずまずきわめて实际的であることが目につく。むずかしい理論や観念よりむしろ実践である。

まず末期癌患者の主要な症状である身体的痛みについて述べ、更

に個々の臓器別の症状コントロールについて細かい所に手のとどく症状の把握とその対応が見事に述べられている。

末期癌の対策は痛みのコントロールのみと思われ勝な誤解を見事消し飛ばして、消化器、呼吸器、尿路、皮膚のケアから、神経、精神的に表れてくる癌患者の持つ特有な症状についてその特徴と対策を具体的に述べている。例えば医療人の対応のし方、言葉づかいにまで触れ、食欲の無い患者に強制せず“赤坊はミルクだけで育ちますよ”呼び掛け、好きなときを好きな時間に与える方法、更にモルヒネ使用者の自動車運転に対する配慮（我が国では禁止）、死前期の対応等々、日常遭遇する臨床上の出来る一つ一つを採り上げ解説し処置を述べている。

当然心理、社会的な問題にも触れ、患者に希望を持たすための会話のし方、特に家族に対する対応には焦点をおき、家族に話すべきこと、家族が病院ではたすべき役割、退院後家族が行うべきこと等々ここにも細かい気くばりがみられる。

鎮痛剤の中で常用されることの多いモルヒネに関しては特にQA方式を採り上げ実に63項目にわたり投与量、投与時間、併用薬、投与方法等正にモルヒネのすべてについて分かり易く解説し、すぐ

に応用出来る数値が示されている。例えばまだ日本ではこれを使えばよいと思われているいわゆるプロンプトーカクテルについてもモルヒネのみの水溶液よりは優る効果が無いこと、副作用が多いと評価し、もう過去存在であることを明確に述べている。

以上各項目を通して一貫していることは正に患者中心に医療人がどう対応するかを末期癌の患者さんが持つているほとんど総ての問題点を網羅し、何か具体的問題にぶつかればその項を見るとその対応が細かく指示されているようになっている。

だから日本のように末期癌の特別な病棟を持たない所で末期癌の患者さんを診療せねばならない時でも本書さえ手元に置いておくとすぐ役に立てることが出来る。

また本書は訳者武田先生のたくみな日本語で表現されているので読み易く、これが訳本である事を感じさせない。また薬剤に関しては日本で入手出来るものと出来ないものが一見して分かるようになっていたのでその使用の可否はすぐ判断出来る。また内容も決してむずかしくないから一人でも末期癌患者を持っている勤務医や地域医療の先生方また薬剤士、看護婦さんを含む医療人は座右において利用すべき書である。

この書が広く利用されることにより18万余の癌死を迎える患者さんの生存の質（Quality of Life, QOL）が向上することを心より願って本書を紹介させていただく。

（A5変形、頁236、図8、表31、1987、¥2,100 千300、医学書院刊）